

Title	積翠寺蔵和漢聯句「心もて」注釈：天文十五年の武田晴信・三条西実澄・妙心寺派禅僧
Sub Title	
Author	小川, 剛生(Ogawa, Takeo)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	2020
Jtitle	三田國文 No.65 (2020. 12) ,p.116- 138
JaLC DOI	10.14991/002.20201200-0116
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-20201200-0116

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

積翠寺藏和漢聯句「心もて」注釈

——天文十五年の武田晴信・三条西実澄・妙心寺派禅僧——

小川 剛生

一、はじめに

この和漢聯句一座は、天文十五年（一五四六）七月二十六日、甲府北方の積翠寺で行われ、現在も同寺に折紙の形で蔵される。武田晴信（信玄）ほか十一名が参加し、発句は晴信、入韻句（脇句）は甲府下向中の権大納言三条西実澄、第三は恵林寺の前住で妙心寺派の禅僧鳳栖玄梁であった。

武田氏時代の甲府歌壇の催しで、唯一全貌が知られるのみならず、戦国時代に流行した和漢聯句・漢和聯句の、東国における数少ない伝存作品でもある。

そこで開催の背景、連衆の構成、文芸的な特色など考察した上で、各句の注釈を施し、一座の行様を辿るようにした。戦国大名武田氏の文学活動、あるいは室町の地方文芸として評価されるための基礎としたい。ただ、連歌や和漢聯句は場の感興を命とする文芸で、後世の人間がそれを再現することは至難である。注釈にはなお迷うところが多々ある。識者の批正を乞う者である。

二、開催の背景——三条西実澄の甲斐下向

天文十五年（一五四六）五月七日、すでに文化人として名声高かった三条西実澄（実世・実枝）は後奈良天皇の綸旨（内容は未詳）を武田晴信に賜るべく、四辻季遠と共に京都を出立した。駿府を経て、六月十一日、甲府に到着した。

晴信は、四年前の同十一年に諏訪頼重を滅ぼし、諏訪・上伊那を従えた後、本格的な信濃侵攻に着手し、この年の夏には佐久地方を攻めた。凱旋の意気揚がるとき、勅使実澄らを迎えたことになる。綸旨の内容をこれと関係させる見解がある。実澄は二ヶ月余りを甲府で過ごす。この間、七月末から八月初めにかけて諏訪・善光寺まで足を伸ばした。これは実澄の希望であろうが、いっぽうで拡大した版図を示すべく、晴信が踏査を奨めたものであろう。³⁾

「三条西実澄公甲信紀行の歌」と題する実澄の当年の詠草が伝わっている（以下、「甲信紀行の歌」とする。⁴⁾）。正確には実澄の旅に随従していた遁世歌人田村長伝の筆録である。錯簡と欠落があるが、その足取りがつぶさに知られる。

甲府の実澄は晴信と盛んに和歌を贈答、あるいは漢詩に唱和した。また六月三十日には和漢聯句（晴信の主催であろう）に「風や秋なびくは民の草葉哉」という発句を贈り、七月一日、実澄宿所に晴信が参り長延寺にて当座歌会があり、十二日には実澄が晴信を訪ねてその館にて当座歌会がある、といった具合に交流が重ねられた後、積翠寺に詣で、七月二十六日、この和漢聯句が開催されたのである。

積翠寺は甲府市北方の要害山の南麓、標高五〇〇メートルを越える山腹にある古刹である。鎌倉後期、臨済宗夢窓派の禪院として再興、さらに晴信の父信虎が居館躰躰ヶ崎館の詰城を造営、同じく重臣の駒井高白斎（昌頼）が寺域を整備したことで大いに発展する。大永元年（一五二一）十一月三日、晴信はこの地で誕生した。また同寺はこの頃に妙心寺派（関山派）に転じた。晴信の妙心寺派への帰依が厚かったからである。

当時、積翠寺の「高白斎」にて、歌会や和漢聯句が行われたことは為和詠草にも見える。この和漢聯句もそうであろう。寺域に昌頼の設えた庵室ということになるが、客殿としても機能したのである。昌頼は晴信の治世となって、他大名への使者を務めたほか、甲斐に下向する公家衆の接待にも当たった。眺望に優れる上、かつては境内に泉水があり、高さ八、九尺の巨石に滝として落ちかかっていた。雅会にふさわしい場である。実澄もまた甲府滞在の最後に再び「積翠寺高白斎所」に詣でて、一泊して帰洛の途に就いている。

ところで、甲信紀行の歌は、ちょうど七月十三日から二十七日の間を欠くので、積翠寺の和漢聯句のようすは知り得ない

が、二十八日には実澄たちは既に諏訪への道中にあり、宿泊した清光寺（現・北杜市長坂町大八田）での詠があるから、二十七日には甲府を出立していなければならない。すると二十六日の和漢聯句は、実澄を見送る意味もあったかも知れない。

三、連衆の構成と特色——妙心寺派禅僧の活躍

ついで連衆十一名を一覧し、略伝を記したい。公家は一字名を用いているが、以下は実名で示す。なお、句上げの一部の作者には注記があり、参考になる。これは後世の補記ではなく、会の開催当時の内容であると認められる。

晴信 5句（漢4和1）。武田信虎男。従五位下大膳大夫。二十六歳。

龍（実澄） 6句（漢5和1）。三条西公条男。正二位権大納言。三十六歳。

鳳栖 7句（漢7）。禅僧。法諱は玄梁。妙心寺東海派。大正宗弘の資。天文十三・十四年に塩山の恵林寺に住し、ついで甲府の東光寺に住した。

蘭（季遠） 5句（漢1和4）。四辻公音男。従二位権中納言。三十四歳。武田氏と関係が深く、甲府には生涯少なくとも五回下向している。

台運 3句（和3）。甲信紀行の歌によれば、実澄の帰洛を本栖まで見送り、長伝と別れの歌を贈答している。その内容から甲斐の人で、かつ高齢であったと考えられる。

其阿 4句（和4）。時僧。芝崎道場と称した、武蔵江

戸の日輪寺の上座僧。日輪寺は時宗の三道場の一つで、住僧は連歌を嗜んだ。

恵臨

2句(和2)。実澄の随従。甲信紀行の歌に所見。

信常

2句(和2)。大井信達(宗芸)男。上野介。晴

信叔父。和歌を好む。

湖月

5句(漢5)。禅僧。甲府法泉寺に住した。天文

十八年九月鎌倉禅興寺、永禄六年四月京都建仁寺に出世した

「湖月守鑑」があり、同人次(後述)。

長伝

3句(和3)。医師の田村安栖軒。号は相玉。実

澄に随従した。甲信紀行の歌に所見。家集心珠詠藻あり。

周間

2句(和2)。伝未詳。

句上げには各人の句数が記されるが、不正確で、晴信・鳳栖・季遠・台運のそれは実際とは合わない。なお19には作者の名がないが、18と同じく鳳栖の句が連続するために記さなかつたと見られる⁹⁾。

* * *

連衆の構成についてはさまざまなことが言えるが、二つのことを指摘しておきたい。

一つは実澄の存在の大きさである。実澄はおそらく当時最も和漢聯句に長じた人物であった。実澄は十六歳の大永六年九月九日から、父公条や昵懇の廷臣と五日ごとに和漢聯句を行った。鍛錬の甲斐あつて、七年五月十九日には禁裏の御会に初参し、九月十三日御会で執筆を務め、さらに翌享禄元年十月十三日の御会では発句を出した(実隆公記・二水記)。発句は一座

の名手が詠むものだから早熟である。以後、京都の主要な会で実澄の名を見ないものはない。自負もしていたであろう。そのような名手の来甲に晴信は心を動かされた筈である。ただ武田氏一門・家臣の確実な参加者は大井信常だけである。和漢聯句はやはり関が高く、容易には催せなかつたのであろう。

ここに実澄の旅に随伴したらしき人々が混じる。台運・恵臨・長伝の三名は甲信紀行の歌に見え、伝未詳の周間もそうかも知れない。いずれも和句を数句詠んでいるだけであるが、非力な彼らに加えられたとすれば、逆に実澄の主導性が際立つ。なお執筆の役は誰とも知られないが、上記のうちの誰かであるはずである。また武蔵江戸から参加した時衆其阿はかつて実隆に直接和歌の指導を受けた可能性があり、ならば実澄とも面識があつたことになる。

また客発句、亭主脇という慣例からすれば、実澄が主催した会となる。実際には甲斐に下向してきた実澄が客人であり、現に晴信の発句は実澄を歓迎する内容となっている。六月三十日の会では実澄が発句を詠んでおり、他の会でもそうであろうから、ここで主客を顛倒させたものかも知れないが、ともあれこの会については実澄がホストである。

ついで、漢句衆の不足を補う禅僧の活躍である。地方での和漢聯句の催しにある程度共通することであるが、ここで専ら漢句を出せるのは鳳栖と湖月の二人である。とくに鳳栖は突出する。晴信・実澄・季遠が兼作したものの、鳳栖と湖月が参加するからこそ、この会は初めて和漢聯句になつたとさえ言える。

鳳栖は実際に甲斐に赴いて、晴信の帰依を受けた最初の妙心

寺派禪僧と見られている。⁽¹²⁾塩山の恵林寺ついで甲府の東光寺に住した。東光寺は蘭溪道隆を開山とする大覚派の禪寺で、鎌倉幕府によって諸山とされていたが、鳳栖の止住を契機に妙心寺派に転じた。地方の諸山は五山の支配下にあったが、五山が衰頹すると、経営はしばしば妙心寺派に委ねられた。その転派は、再興の形を取り、おおもね平和裡に行われたらしい。甲陽軍鑑巻一・第四品によれば、晴信が自身の宗旨を臨済とすることを決めて京都五山の長老惟高妙安・策彦周良に相談すると、兩人は固辞し、かえって「太守の御用には妙心寺派御尤たるべき」と奨めた。このため晴信は妙心寺派の岐秀元伯に参禅し、得度にあたり機山信玄の法名を授けられたという。これには脚色も含まれるが、甲斐の妙心寺派勃興の事情をよく物語る。なお、鳳栖は岐秀の法兄である。

いっぽう、湖月は法泉寺に住したとある。法泉寺も諸山となつた夢窓派の禪寺であるが、やはりこの時期に妙心寺派に転じたらしい。

ところで、天文十八年に古河公方足利晴氏の公帖を得て、鎌倉十利の禪興寺に住した湖月守鑑という禪僧がいる。この湖月守鑑は永祿六年（一五六三）に、「田舎より」晴氏の公帖を京都に送り、天龍寺ないし相国寺の出世を希望した。結局、建仁寺に出世したが、これは妙心寺からの申し入れがあり、足利義輝側室小侍従が取り次いだという（鹿苑院公文帳・鹿苑日録）。湖月守鑑が法泉寺の湖月であるとすれば、甲斐にあつて、まづ地方の諸山、ついで鎌倉の十利、さらに京都五山の順に出世したことになる、諸事吻合する。⁽¹³⁾湖月守鑑は妙心寺派との関係

が深かつたらしいが、これも当時の甲府の状況に照らしてあり得ることである。湖月は妙心寺派と交流する五山僧として目立つ存在であつたのであろう。

鳳栖は、湖月とともに、人数では圧倒的に勝る和句衆に対峙して、鮮やかな漢句を出しては一座を進行させ、存在感を示している。実澄も自身に匹敵する力量に満足したであろう。二人の活躍は、この時代の地方禅林の実態が反映されている。

四、文芸的特色

この和漢聯句は、四十四句で完結する、「世吉」と呼ばれる略式である。

世吉連歌は江戸期にはある程度流行するが、戦国期には新しかったと見られる。まして和漢聯句は珍しい。⁽¹⁴⁾しかし当時、全く例がない訳ではなく、鷲尾隆康の日記、二水記大永元年（一五二一）五月十二日条に、

早朝参竹園、有御相伴事、式（寛政親王）大輔近日可下国云々、仍被召之了、食後和漢四十四句有之、午後参内、

とある。高辻章長の越前下向を送る伏見宮での朝食に陪し、その後和漢聯句に出て、午後参内したという。時間的な制約、また四十四句は「始終良久」に通ずるため、饒別に相応しいと選択されたらしく思える。永祿十年五月九日、駿河清見寺で張行の「四十四句」も和漢らしい（紹巴富士見道記）。

さらに世吉の特色について、比較的事例の多い連歌の例を参照して考えたい。

江戸後期の連歌師阪昌成は、世吉連歌は、連歌師の周桂（一

四七〇（一五四四）・宗養（一五二六・六三）・昌休（一五一〇
（五二）の頃より現れ、百韻から初折と名残折とを合わせた、
略式のものである、と述べている。⁽¹⁵⁾これは実際に照らしてもだ
いた正確のようである。

世吉の形式は戦国期に起こり、かつ何かと制約の多かった地
方で好まれたのではないか。その式目の詳細は知り得ないが、
おおよそ百韻のそれを踏襲し一部では緩和したものであり、初
折・名残折の二紙四面で完結する点ではむしろ歌仙に近いかと
推測できる。

以上を踏まえ、この和漢聯句の特色を、漢和法式の定めると
ころと対比して順不同に挙げるとつぎのようになる。

(1) 和漢 百韻では和漢が各五十句となるよう完結するのが法
則である。また面八句も和漢をそれぞれ四句とし、漢句の対
句一対を混ぜるとされる。この和漢聯句ではたしかに各二十
二句となっているが、面八句では和五、漢三であり、当然対
句も作れない。ちょうど中間、初折の裏、22を付けた時点
で、和漢が各十一句と等分する。15→19で漢句を五句連続さ
せて、不足を挽回した跡が窺える。

(2) 花月 百韻では四花七月、歌仙は二花三月とされるが、世
吉連歌も二花三月であるようで、この和漢聯句も同じであ
る。なお百韻の花四句は和漢それぞれ二句づつを出すことに
なるが、ここではそういう配慮はない。三月は夏月・秋月・
春月となっており、分散させたか。

(3) 一座何句物 百韻では着想の繰り返しを避けるため、同一
題材の複数回の使用には一句物から五句物まで細かな制限が

ある。世吉の場合、これをそのまま適用するか、半減させる
か（たとえば一座四句物ならば二句物とする）両様があり、
宗匠の考えに委ねるともいうが（連歌百談・八十五）、現実
にはせいぜい二句物に注意すれば事足りる。また和漢の百韻
では二句物は和句漢句各一というが、これは無視される。

(4) 句数 百韻では和句・漢句それぞれ連続は五句まで（漢句
は対句があれば六句まで許容）という規定がある。これは遵
守されている。さらに春・秋の句の連続は三→五句、恋は二
→五句、夏・冬・山類・水辺・居所・夜分・神祇・釈教・述
懐・旅は三句までという規定があるが、実際は春・秋・恋の
句は最小限の連続で離れることが多いようである。この和漢
でも春秋は三句続き、恋は二句続きを守っている。

(5) 去嫌 31「采」32「槐」は28「花」に（木は三句去り）、
34「草」は32「槐」に（木と草は二句去り）、それぞれ抵触
する。また16→18で水辺の体・用・体となる。やや目立つ感
もあるが、世吉では句去りの厳守は難しかったものか。

(6) 平仄・韻字 漢句で平仄を見ると、25の第四字が孤平、44
が下三平となっている。但し孤平は第二字以外問題とされな
かったようである。また押韻字は上平声第十仄韻で、十句に
押韻するが、韻字に珍奇なものはなく、韻府群玉の範疇に収
まっている。

(7) 典拠 和句・漢句の変わり目で、それぞれの句境を引き取
り転ずるところが和漢聯句の妙味であろう。ここでは漢句衆
の鳳栖・湖月が活躍している。

7水上もわかず落くる瀧見えて

恵臨

8 龍門魚曝腮

湖月

前句は増水した滝の景、これを龍門としたのは分かり易いが、登竜門の典故となった後漢書の李膺伝の注を参照して、登れなかった魚が恨めしく上を見ているさまとした。

33 ゆく心千里隔つる波もなし

蘭

34 幾度緑徘徊

鳳栖

前句は本歌の「はるかなるもろこしまでもゆく物は秋の寢覚めの心なりけり」により、秋の寢覚めの心は遠く行くと詠んでいるが、付句で、匈奴に捕らわれた漢の蘇武にとりなした。望郷の念の募る余り、沙漠の地で見る夢のうちで「幾度か緑徘徊す」としたのは句境としても上乘であろう。とくに鳳栖の句は、他にも、3は杜詩に、12は周易に、36は「賈島仏」と、いずれも故事典故を踏まえ、かなりひねって作られており、その学識を垣間見させる。

晴信の漢句は素直な付け方であるが、和歌に付けた漢句が三句もあるのは自信の現れであろう（11・25・43）。やはり故事典故の理解の深さが窺える。詩作に耽って板垣信方に諫められた甲陽軍鑑巻九・第十九品の逸話は有名で、軍馬の間に培われた教養の高さを物語る。

なお、晴信は前句の「友鶴」から仙術の「縮地」を出し（25）、湖月は「わする、草」から「兄弟」を付け（41）、和句を漢句へ移すのに故事を用いたが、これは本邦で独自の変容を遂げた漢故事、ないし漢故事に擬装された本邦の説話といえる。漢句がしばしばこうした出所不明の典故に基づくのもこの時期の特色である。

五、小 結

積翠寺和漢聯句の意義を、歴史・文芸の両面から考察した。地方歌壇の史料の乏しさによって推定に頼る面もあるが、同時代の事例を集めることで、ある程度の類推はできた。

その上でまとめれば、武田氏の文事であると共に、まず、三条西実澄なくしては成立し得なかったと言える。実澄と甲府との縁が初めて生じた年の催しであることは象徴的であった。

実澄はさすが才人であり、和漢ともそつがながい、六句のうち、晴信の句に付けたのが三句、鳳栖の句に付けたのが二句あり、この二人を実澄がフォローしながら進むのが行様の特徴であった。なお他の和句衆は、最も多い季遠以下いささか個性に乏しいが、実澄に随従していたせいかとくに破綻はない。

そして実澄に伍し得た鳳栖・湖月の存在も欠かせない。戦国期の和漢聯句は、早く駿河の今川義元のもとで活況を呈し、遅れては越後の直江兼続が頻りに行ったが、これは妙心寺派の東海への進出と連動する。妙心寺派の禅僧は戦国大名との交際にあたり、和漢聯句をよく用い、実際、名手が多い¹⁶。義元には太原崇孚の、兼続には南化玄興の、それぞれ多大な感化があった。晴信のもとで活動した鳳栖もその位置にあり、和漢聯句の東漸に貢献したのである。

地方での催しであり、さまざま制限があったことが推測され、実際、停滞を実澄や鳳栖に救われた感もあるが、総じて成功した一座であるといえる。逆に、連歌ではなく、敢えて和漢聯句が企画されるためには何が必要であったかをも推察するこ

ともできる。

最後に、この和漢聯句唯一の伝本であり、注釈の底本とした積翠寺蔵本の書誌を記す。

折紙(一八・九×五二・四)を二枚、紙縫で結び綴じにする。料紙は斐楮交漉の打紙、江戸前期の写し。全文一筆と認められる。字高一六・五、漢句・和句とも句・作者一行書き、末尾に二段で句上げを記す。木箱は近代のもの、包紙・鑑定書など伝来を窺わせる附属品はない。

書写の態度は丁寧で、用字も特殊ではないが、曖昧な字形もあり、翻刻によって判読が分かれる文字が若干ある。なお東京大学史料編纂所蔵影写本があり、翻刻としては注1に掲げた諸論攷のほか、『甲府市史 史料編1 原始・古代・中世』(甲府市、一九八九年)、『室町後期 和漢聯句作品集』(臨川書店、二〇一〇年)などがある。

注

- (1) 大日本史料第十編之十五、天正元年四月十二日条に一部掲載。清水茂夫「武田信玄の文芸」(甲府市史研究5 一九八八年九月、河住玄「武田信玄公の詩歌(下)」(欣求庵、一九八八年)、村松定史「武田晴信『倭漢聯句』のこと」(日本連句協会編『2003連句年鑑』二〇〇三年九月)、萩原留則「積翠寺の倭漢聯句解説」(未刊)。(志村司郎編、私家版、二〇一二年、海老沼真治「和漢聯句と甲州法度之次第」(武田氏研究会編『武田氏年表 信虎・信玄・勝頼』高志書院、二〇一〇年二月)、橋本照雄「武田信玄公『倭漢聯句』万松山積翠寺蔵」(私家版、二〇一二年)など。
- (2) 論旨の内容について、渡辺世祐「武田信玄の経緯と修養」(新人物往来社、一九七一年)は、「甲斐・信濃において新たに御料所進

献を論されたものであらう」とし(二三〇頁)、柴辻俊六「戦国期武田氏の京都外交」(武田氏研究26 二〇〇二年三月)も踏襲する。いっぽう秋山敬「甲斐・武田氏と国人の中世」(岩田書院、二〇一四年)第一編第三章「四辻季遠の甲斐下向とその目的」武田晴信の対朝廷策と関連させては、四位信濃守に叙任するものかとする(この場合は、口宣案を論旨と称したことになるが、例がない訳ではない)。高白斎記(甲陽日記)によれば、到来直後には「論旨之御祝儀」を行っており、晴信が発給を切望していた感を受ける。そして八月十九日、帰京する実澄に、晴信が来年より一万疋を信濃の御料所として献上することを約束し、さらに「信州十二郡入手候者参万疋加増可申付」としている(なお、信濃国は十郡であるが、木曾を二郡として加えることがあった)。信濃の敵対する勢力への治罰論旨であった可能性もあるか。

(3) 甲信紀行の歌では、諏訪までの道行きは記されるのに対して、諏訪から善光寺の間は記事も歌もなく(姨捨山のような名所があるにもかかわらず、善光寺での詠六首が記されるのみである(うち五首は心珠詠藻にも見える)。但し、実澄が信濃への軍事行動を承知していたのは諏訪郡代であった板垣信方に、「草も木もなびかざらめや道しあるしなの、ま弓ひくにかかせて」という歌を贈ったことでも分かる。別稿にて詳しく論じたい。

(4) 原本は三条西家蔵だが現在所在不明、大正十四年(一九二五)福井久蔵による影写本(井上宗雄氏旧蔵)が伝わるのみ。引用は筆者撮影の写真による。翻刻は伊藤敬「室町時代和歌史論」(新典社二〇〇五年)第五章・六「実枝」に収められる。

(5) 小川「心珠詠藻の作者」戦国大名と在国公家とのほごまにて(文学135 二〇一二年九月)参照。

(6) 長延寺(現在の光沢寺)は一連寺の西隣に所在した。注(2)前掲秋山著書第三編第二章「一連寺門前町の成立」参照。下向する公家は時衆とも交流も深かったから、この附近に寄宿したのであらう。

(7) 平山優「駒井高白斎の政治的地位」(戦国史研究39 二〇〇〇年二月)。

(8) 注(5)前掲拙稿参照。

(9) 和漢聯句・漢和聯句では、句が続かず停滞した場合、同一作者が自分の句に付けることが見られる。たとえば慶長六年(一六〇一)、直江兼統が米沢で主催した漢和聯句でも、

65 暑於槐蔭避 兼統

66 松操祝元正 兼統

と兼統の句が二句連続している。これも地方ゆえの漢句衆の不足によるものであろう。川崎美穂「慶長六年十月四日漢倭聯句「落葉雨天下」注釈―直江兼統主催の漢倭聯句」(慶應義塾高等学校紀要 51、二〇二〇年二月)参照。

(10) これより十五年前、実隆公記享祿元年十月四・七日条に、実隆に面会し、詠草の合点を依頼した「関東時衆」の「善福寺其阿」がいる。関東で時宗の善福寺といえは、武蔵品河のそれである。もとより同名異人が多いが、この其阿が、やがて江戸日輪寺に移住したのではないか。

(11) 小山市立博物館蔵石塚文書(全六点)のうちに、戦国末期のものらしい「和漢連句」が含まれる。初折のみの残闕で、作者は十一名、うち漢句衆は三人、二十二句のうち和句は一七、漢句は五と著しい不均等が生じている(ここからほんらい世吉ではなく百韻であろうと推測できる)。

石塚氏は阿(安)房神社(小山市)の社家粟宮氏の一門で、栗橋城主野田弘朝(天文・永祿頃の人)に仕えた武士である。文書五点の本文は『小山市史 史料編・中世』や佐久間弘行『小山市立博物館所蔵『石塚文書』・『大橋文書』(資料紹介)』(小山市立博物館研究紀要 3 一九九二年三月)で考察されているが、「和漢連句」は未紹介。実物を調査できたのでついでに報告する。「和漢聯句」と題し、発句は「ことし生の竹にかくる、軒端哉 源水」、入韻句は「聴月緑陰鵬 弃瓢」。伝来は一切不明で、石塚氏・野田氏との関係も分からないが、入韻句作者の「弃瓢」は、諏訪上社権祝家矢鳥氏か。弃瓢は天正十年(一五八二)前後、信濃下伊那の国人知久頼久に仕えており(矢鳥文書・同年五月二十三日矢嶋弃瓢書状)、知

久氏は徳川家康に従って関東に転戦したので、石塚氏・野田氏との接触の可能性も考えられる(なお矢鳥文書は「弃瓢」と読まれているが、「弃瓢」であることが確認できる。「弃瓢」であれば許由の故事に因む名前になる)。この推定が正しいならば、戦国期の甲信か関東での数少ない遺品となる。

(12) 野村常重「武田信玄と関山派の僧」(歴史地理 71・2・4、一九三八年二・四月)、横山住雄「武田信玄と快川和尚」(戎光祥出版、二〇一一年)、岩永紘和「戦国期東海・甲信地方における臨済宗妙心寺派の地方展開」(信濃「第三次」72・8 二〇二〇年八月)など。

(13) 阿部能久『戦国期関東公方の研究』(思文閣出版、二〇〇六年)第三章第二節「関東公方の関東禅院支配―公帖の分析を通して」によれば、当時、古河公方が鎌倉禅興寺の公帖を発給したのは地方の諸山に住した者に限られ、またすべてが座公文とみなされる。法泉寺の住持であった湖月はよく条件に叶う。ところで、同じく甲陽軍鑑には「くわんしゅそ(鑑首座)」という禅僧が登場する。議論好きで、快川にも法問を仕掛けた。晴信に認められ、信勝(勝頼の子)の師範となったとある。この「鑑首座」は湖月守鑑とは別人であろうが、妙心寺派と共存した、甲府の五山僧の横顔を伝える。

(14) 福井久蔵は享祿三年(一五三〇)二月十七日の世吉和漢聯句を現存最古とするが、これは百韻である。「連歌の史的研究 後篇」(有精堂、一九六九年)四〇五頁。

(15) 連歌集書(静嘉堂文庫蔵)第九六冊「世吉連哥之事」による。現在、内容の知られる最古の世吉連歌は享祿元年十月七日、東寺での山何世吉「小春とて」であり、伊予の大山神社奉納連歌がこれに続く。天文十八年(一五四九)四月から永祿四年(一五六一)四月までの間に九点もの世吉連歌の懷紙原本が同社に伝来する。懷紙の書式は確かに昌成の語の通りで、また端作りは百韻と違わない。さらに永祿九年八月二十一日の何人世吉「みるめにも」がある。これは佐渡国羽茂(現佐渡市羽茂町)において、飛鳥井雅教を迎えて現地の国人本間高季が興行したもの。連歌(京都女子大学附属図書館吉沢文庫蔵、三冊、江戸前期写、飛鳥井雅庸筆か)第二冊所収。

(16) 妙心寺派禪僧と東国大名の文事との関係は、拙稿「戦国大名と和漢聯句―駿河今川氏を中心に―」(国語国文87・7 二〇一八年七月)、「今川文化の歴史的意味―和漢聯句を視座として―」(黒田基樹編『戦国大名の新研究―今川義元とその時代― 戎光祥出版 二〇一九年) 参照。

(17) 第一紙表裏にそれぞれ一四句・二六句、第二紙表に一四句を記し、裏は句上げとなっている。これは世吉連歌の書式(八・一四・一四・八)には外れ、また法量も当時よく用いられた連歌懷紙よりかなり大きい印象がある。後世の転写であって、懷紙の形式を摸したにしても、原懷紙の姿をそのまま止めたものではなからう。これを指して「懷紙写」とする表現は適切ではないように思われる。

附、注釈

(凡例)

一、積翠寺藏和漢聯句を注釈した。まず底本の翻刻を掲げ、ついで各句の注釈を載せた。

二、翻刻は句読に算用数字で通し番号を付したほかは、原本の体裁や字体をできるだけ忠実に保存した。

三、注釈は、最初に句の本文を掲げた。原則として通行の字体に改め、また濁点を付した。漢句では左に平○・仄●・押韻字◎の記号を傍記し、読み下しを下に() に示した。ついで式目、語釈、句意、付合の順に項目を立てて解説した。

1、平仄・韻字は広韻および韻府群玉によった。

2、式目は季・題材・物数のある語などを記した。連歌新式および追加・新式今案・和漢篇・漢和法式を参照した。

①四季の句は() にその根拠を記した。

②題材は光物・時分・聳物・降物・山類・水辺・動物(獣鳥)・植物(草木)・人倫・居所・衣類・旅・名所・恋・述懐を判別して示した。

③一座何句物は、使用上限回数と、用いられた回数を記した。たとえば「④原1」とあったら、「原」は一座四句物で、その句で一回目に使われたことになる。

3、語釈では、必要に応じて和歌・連歌・散文での用例を読みやすい形にして示した。漢文の引用は書き下しを() に入れて直後に置いた。

4、句意では、必要に応じて() に入れて語句を補った。

5、付合では、寄合・本歌・本説、句の付け筋を解説した。

寄合語は、連珠合璧集(木藤才藏ほか校注『連歌論集一』(三弥井書店、一九七二年) 所収)、随葉集・拾花集・竹馬集(深沢眞二編『近世初期刊行 連歌寄合書三種集成』(清文堂、二〇〇五年) 所収) で確認し、その関係を「萩↓雁がね」(竹馬) のような形で示した。典拠は略称を用いた。

四、末尾に式目表を作成した。去嫌の法式に違反するところは網を掛けた。

(翻刻)

天文十五年七月廿六日於積翠寺

倭漢聯句

- 1 心もて染すはちらし小萩原
- 2 新霜有鴈来
- 3 搗衣空外力
- 4 かり寝の夢の覚るほとなき
- 5 月は猶残る雲間の影涼し
- 6 晩雨はるゝあとの山の端
- 7 水上もわかす落くる瀧見えて
- 8 龍門魚曝腮
- 9 名に高き道をそあふく家の風
- 10 末まで色のふかきことの葉
- 11 寫情春意緩
- 12 政質泰文回
- 13 八重咲もひとへを花の初にて
- 14 うすき霞に匂ふ梅が香
- 15 仮山含万象
- 16 巨海極三才
- 17 潮與佩聲漲
- 18 泉令琴韻摧
- 19 記晴歌月出
- 20 星まつる夜の半天の雲
- 21 稀にあふ露の契はうきちきり

晴信 龍 鳳栖 台運 其阿 湖月 長傳 周閑 晴信 鳳栖 龍 信常「1表

22 来跡草無媒

23 占隱人倫絶

24 ひとり伴ふ友鶴の声

25 盡欲縮湘景

26 漕ゆく船の遠きうら波

27 仄にも見渡しかすむ朝朗

28 花の香ふかく月のこる空

29 鶯舌啼春破

30 帰る山路は霧やむせはん

31 就荒黄落采

32 炊黍黒甜槐

33 ゆく心千里隔つる波もなし

34 幾度緑徘徊

35 吟履為誰湿

36 詩篇教仏推

37 法もたゝ謀をや道ならん

38 身を治てそ世をおさめしる

39 何事も心を種のわさなれや

40 わするゝ草のしけらすもかな

41 若盟兄弟好

42 ねくらの鳥の去さらぬこゑ

43 野遭春日促

44 雪使韶光纔

晴信 六句

信常 二句

龍

湖月

蘭

晴信

台運

其阿

長傳

湖月

信常「1裏

鳳栖

龍

蘭

鳳栖

湖月

鳳栖

其阿

周閑

長傳

蘭

湖月

惠臨

晴信

龍「2表

龍三條 六句

鳳栖 五句

蘭四辻 六句

台運 四句

其阿 四句

惠臨 二句 2裏

法泉寺先住 湖月 五句

長傳 三句

周間 二句

〔注釈〕

1 心もて染ずばちらじ小萩原

晴信

〔式目〕 秋（小萩） 植物草（小萩） ④原1

〔語釈〕 ○染ずばちらじ「染めないならば散るまい」では意が通らない。「染ればちらじ」の誤りか。○小萩原 小萩の咲く野原。小萩は初秋、紅葉よりも先に咲いて散る。「ちにけり鹿なく野辺の小萩原下葉の色もみぢあへぬに」（続千載集・秋上・四二二、龜山院）。発句では当季の情景を詠み込む。客の立場ながら、甲斐を訪ねた実澄らへの歓迎の意が込められている。

〔句意〕 真心で染めなかったら（染めたから）花は散るまい、この小萩の原では。

2 新霜有雁来（新霜に雁来たる有り） 龍

〔式目〕 秋（雁来） 降物（新霜） 動物鳥（雁） ②雁1

〔語釈〕 ○新霜 その年初めて降りた霜。○雁 越冬のため北国から渡る雁。甲斐に來た自分たちを寓するか。

〔句意〕 霜が初めて降り、雁がやって來た。

〔付合〕 「萩↓雁がね」（竹馬）。「なき渡る雁の涙やおちつらむ物思ふ宿の萩の上の露」（古今集・秋上・二二一、よみ人しらず）。

3 搗衣空外力（搗衣は空外の力） 鳳栖

〔式目〕 秋（搗衣） 衣類（衣） ①砧1 ④空1

〔語釈〕 ○搗衣「搗衣」と同じ。光沢を出すために板に張った衣を砧で打つ。女性の仕事とされた。「きぬたゝ搗衣只同事也」（連珠）。○空外力「空外」は辺境の寂しい土地。杜甫の「用盡閨中力、君聽空外音（用ひ盡くす閨中の力、君よ聴け空外の音）」（集千家註杜工部詩・卷五「搗衣」）による。砧を打ちながら、西域の辺境へ徴兵された夫を思い遣る女の心情を詠む。

〔句意〕 搗衣の音は女の力で辺境まで響く。

〔付合〕 「霜↓白妙の衣うつ」「衣うつ↓雁」（連珠）。また蘇武の故事（雁信）により、雁からは西域の地が連想される。

4 かり寝の夢の覚るほどなき 蘭

〔式目〕 雑 時分夜（夢） 旅（かり寝） ④寝1

〔語釈〕 ○かり寝の夢 旅先で結ぶ夢。産衣に「仮寝の夢はもとより旅なり」とある。

〔句意〕 旅先の仮寝の夢が破れるまで、その間はじつに短い。〔付合〕 「衣うつ↓ね覚の枕」（拾花）。出征している男の立場で受けた。「千たびうつ砧の音に夢覚めて物思ふ袖の露ぞくたくる」（新古今集・秋下・四八四、式子内親王）。

5月は猶残る雲間の影涼し

台運

〔式目〕夏（影涼し） 光物（月） 時分夜（月） 聳物（雲）

③夏月 ②涼 ①

〔語釈〕○月は猶残る 明け方が近い。「月は猶雲まに残るかげながら雪にわけ行く遠の山のは」（新後拾遺集・冬・五三五経賢）。○涼し 月の句であるが夏。「月の涼しき、露涼しきとしては夏也」（産衣）。

〔句意〕明け方近くまだ残る月の光が雲間から洩れいかにも涼しげである。

〔付合〕夢が覚める時間帯とした。「夢」には「凡夜之詞可付也」とある（連珠）。

6晩雨はる、あとの山の端

其阿

〔式目〕夏（晩雨） 時分夕（晩雨） 降物（晩雨） 山類体（山の端） ①晩雨 ①

〔語釈〕○晩雨はる、「晩雨」は夕立。夕立が晴れて山の稜線がよく見えた。「雲間より日かげすくうつろひて夕立はるるをちの山のは」（竹風抄・五・八六三）。

〔句意〕夕立が上がったあとの（くつきりと見える）山の稜線。
〔付合〕涼しき↓夕立の跡（随葉）。「雲間」を夕立の雲にとりなした。

7水上もわかず落くる滝見えて

惠臨

〔式目〕雑 山類用（滝） 水辺体（水上） ①滝 ①

〔語釈〕○落くる滝 瀑布。「白雲にまがひやせまし吉野山おち

くる滝の音せざりせば」（千載集・雑上・一〇三四、経忠）、

「み山よりおちくる滝の色見てぞ秋はかぎりと思ひ知りぬる」

（古今集雅経本・秋下・三二〇、興風）など。

〔句意〕水源も知られず落ちて来る滝も見えて。

〔付合〕夕立が晴れて、増水したため、滝が見えたとする。「水上は夕立すらし山川の岩根にあまる滝の白波」（新拾遺集・夏・二八八、通光）など。

8龍門魚曝腮（龍門 魚 腮を曝す） 湖月

〔式目〕雑 水辺外（魚） 名所（龍門）

〔語釈〕○龍門 黄河の上流、山西省河津県と陝西省韓城県の間にある急流。後漢の李膺は高潔の人で、面会を許された者は将来の出世が約束されたので、これを登竜門と呼んだ。「膺独持風裁、以声名自高、士有被其容接者、名為登竜門（膺独り風裁を持し、声名を以て自ら高しとす、士に其の容接を被ること有る者は、名づけて登竜門と為す）」（後漢書・党錮列伝五十七・李膺伝）。○曝腮 腮は鰓と同じ。前掲後漢書の注で辛氏三秦記を引用し、「河津、一名龍門、水險不通、魚鼈之属莫能上、江海大魚、薄集龍門之下、数千不得上、上則為龍也。」故云曝腮龍門（河津、一の名は龍門、水險にして通はず、魚鼈の属能く上ること莫し、江海の大魚、龍門の下に薄集すれども、数千上ること得ず、上れば則ち龍と為るなり、故に曝腮龍門と云ふ）」とある（「」は太平御覧卷四〇・龍門山などで補う）。韻府群玉卷三・十灰・鰓に「鯉暴鰓」の項目があり、「一魚不得登龍門者、點鰓一矣、詳龍」、卷一・二冬・龍に「物化

龍」として「大鯉登龍門化為龍、不登者点額暴腮矣」とある。

〔句意〕龍門では登れなかった魚が腮を曝している。

〔付合〕前句の滝から龍門を連想。「落くる」も登れなかった魚に響くか。

9名に高き道をぞあふぐ家の風 長伝

〔式目〕雑 居所体(家) 述懐(家の風) ③家1

〔語釈〕○名に高き よく知られた、高名の意。○道をぞあふぐ 前掲後漢書李膺伝に「膺免婦郷里、居陽城山中、天下士大夫皆高尚其道、而汙穢朝廷(膺は免ぜられて郷里に帰り、陽城の山中に居まふ、天下の士大夫は皆其の道を高尚として、しかるに朝廷を汙穢とす)」ともあるのに引かれれば、「道」とは清廉な生き方となる。「すなはなる道をぞあふぐ我が君は神代のままのやすみしる世に」(雪玉集・二五五六「寄世祝」)。○家の風 その家が伝えてきた学問や藝能。多く和歌についていう。

〔句意〕高名な(李膺のような)生き方を理想とする、わが家の伝統。

〔付合〕滝の下に集く魚が、はるか上を仰ぎ見ている様から処世にとりなした。

10末まで色のふかきことの葉

周間

〔式目〕雑 ②ことの葉1

〔語釈〕○末まで 前句の「家」から末裔の意となる。○色のふかきことの葉 深い紅葉から、優れた言葉、和歌の比喩。

「色深みこのしきしまの大和川 紅葉や秋の人のことの葉」(草根集・五・三七四「秋川」)。

〔句意〕その末裔まで、すぐれた和歌を詠む。

〔付合〕「道」を歌道にとりなした。風は葉を散らす。「家の風吹き伝へけるかひありて散る言の葉のめづらしきかな」(山家集・中・九三三)。

11写情春意緩(情を写して春意緩やかなり) 晴信

〔式目〕春(春意)

〔語釈〕○写情 ありのままの情景を表現する。○春意 春のどこかな思い、雰囲気。

〔句意〕情景を写して春の気分はいかにも穏やかである。

〔付合〕前句を具体的な和歌の表現行為にとりなした。

12政質泰交回(政質にして泰交回る) 鳳栖

〔式目〕春(泰)

〔語釈〕○質 素直で正しいさま。○泰交「交」は交。「交泰」と同じ。天地がゆつたりと交わること。君臣の情がよく通ずること。周易卷四「泰、小往大来、吉亨(泰は、小往き大来る、吉にして亨る)」、象伝は「則是天地交而萬物通也、上下交而其志同也(則ち是れ天地交りて萬物通ずるなり、上下交りて其の志同じきなり)」、象伝は「天地交泰、后以財成天地之道、輔相天地之宜、以左右民(天地交るは泰、后以て天地の道を財成し、天地の宜を輔相し、以て民を左右す)」とある。

〔句意〕政治は質朴で天地君臣の間柄がよく通ずる。

〔付合〕穏やかな春の景色を、政治人心の安定に続ける。雑の句のようであるが、「泰」は「泰、通也。為卦天地交而二氣通。故為泰。正月之卦也（泰は通ずるなり。卦たる、天地交りて二氣通ずる故に泰となす、正月の卦なり）」（周易本義卷二）とするように、正月の卦でもあり、春の句とした。これにより前後で春が三句続く。

13 八重咲くもひとへを花の初にて 龍

〔式目〕春（花） 植物木（花） ②花1

〔語釈〕○八重 桜・款冬などが花弁重なり盛んに咲く様。一重との取り合わせも多い。「一重だにあかぬ匂ひをいとどしく八重かさなれる山吹の花」（詞花集・春・四五、長能）。○ひとへ 一重桜。最初に咲く。「ほかの花は、ひとへ散りて、八重さく花桜、さかり過ぎて、樺桜は開け、藤は後れて色づきなどする」（源氏物語・幻）。

〔句意〕八重にも咲くが、一重こそが花では最初に咲く。

〔付合〕盛りの華やかさもまず簡素なのが最初であるという教訓を導いて前句に応ずる。

14 うすき霞に匂ふ梅が香 信常

〔式目〕春（霞） 聳物（霞） 植物木（梅） ⑤梅1

〔語釈〕○うすき霞 春がまだ浅いことを意味する。前句の「ひとへ」を梅に読み替える。「いつくとも木のもとしらぬみか月のうすき霞に、ほふ梅か香」（草根集・十一・八二〇六「梅」）。

〔句意〕うつすらした霞の中から匂って来る梅の香。

〔付合〕「八重↓霞」（連珠）。「あづまぢのやへの霞をわけきてもきみにあはねばなほへだてたる心ちこそすれ」（千載集・雑下・旋頭歌・一二六四、仲正）。

15 假山含万象（假山 万象を含む） 蘭

〔式目〕雑 山類体（假山）

〔語釈〕○假山 庭の築山。「假山カサン作庭」（易林本節用集）。

〔句意〕庭の築山はあらゆる自然の現象を包摂している。

〔付合〕庭の築山から梅香が漂って来る情景に、家の主人が感動する風とした。前句は典型的な春の美景、杜甫の「万象皆春氣、孤槎自客星（万象は皆春氣、孤槎は自ら客星）」（集千家註杜工部詩卷十九「宿白沙驛」）により付けた。

16 巨海極三才（巨海 三才を極む） 晴信

〔式目〕雑 水辺体（巨海） ②海1

〔語釈〕○巨海 大海。○三才 三儀・三元とも。天・地・人のこと。

〔句意〕大海は天地人の三極にわたる。

〔付合〕前句の假山に対して巨海と付けて対句とした。

17 潮与佩声漲（潮と佩声と漲る） 龍

〔式目〕雑 水辺用（潮） ②潮1

〔語釈〕○潮 ここでは潮騒。○佩声 貴人が大帯に懸けた佩玉の音。

〔句意〕潮騒と佩玉の音で充滿する。

〔付合〕大海の情景を受ける。前句の巨海と三才から、有名な王勃「滕王閣序」(古文真宝後集卷三)の世界を想起か。二人の太守が海に臨んだ洪州の滕王閣で天下の才人を集めて宴をした時の序と詩である。詩に「滕王高閣臨江渚、佩玉鳴鸞罷歌舞(滕王の高閣江渚に臨めり、佩玉鳴鸞歌舞を罷む)」とある。海に臨む閣では潮騒と佩玉の音とが充ちていると付けたか。

18 泉令琴韻摧(泉は琴韻をして摧かしむ) 鳳栖

〔式目〕夏(泉) 水辺体(泉) ②泉¹

〔語釈〕○琴韻 琴の音色。○摧 泉の水音が琴の音とが紛れるさま。「隨風落葉含蕭瑟、澌石飛泉弄雅琴(嵐に隨ふ落葉は蕭瑟を含めり、石に澌く飛泉は雅琴を弄ぶ)」(和漢朗詠集・秋・落葉・三二三、順)。摧くとしたのは戴逵の故事による。戴逵(安道)は、東晋の文人で琴書画にも通じた。武陵王の召しを拒んで、使者の面前で琴を壊した(蒙求・戴逵破琴)。

〔句意〕流泉は琴の響きを打ち消す。

〔付合〕対句。前句の「佩聲」は戴逵のもとにやって来た王の使者のそれを想起するか。

19 記晴歌月出(晴を記せば歌ひて月出づ) (鳳栖)

〔式目〕秋(月) 光物(月) 時分夜(月)

〔語釈〕○記晴 不明、後述する王徽之の道中の描写か。

〔句意〕晴を記すと、吟詠するうち月が照らす。

〔付合〕前句が「戴逵破琴」によるので、この戴逵を王徽之

(子猷)が訪問する「子猷尋戴」の故事から着想か。蒙求和歌卷七から引く。「晋ノ王羲之ガ第四ノ子王子猷、戴安道トハ多年ノ友ナリ、琴詩酒ノ遊ニハ、席ヲヒトツニシ、雪月花ノナガメニ、袖ヲツラネズト云フコトナシ、子猷、山陰ニコモリキタルニ、夜オホキニ雪フレリケリ。子猷ネブリサメテ、酒ヲクミテ四望スルニ、景氣皎然タリ、ヒトリ心ヲスマシツツ、左思ガ招隱ノ詩ヲ詠ジテ、剡県ノ戴安道ヲ思ヘリ、即チ一小船ニサヲサシテ、剡県ニオモムク、沙堤雪白クシテ、水面ニ月浮ブ、船ノウチノナガメ、浪ノ上ノアハレ、ヒトツトシテ心ヲクダカズト云フ事ナシ(下略)」。

20 星まつる夜の半天の雲 台運

〔式目〕秋(星まつる) 光物(星) 時分夜(星) 簞物(雲)

〔語釈〕○星まつる夜 七夕。

〔句意〕七夕の星を祭る夜、中空にかかる雲。

〔付合〕前句を七夕として付けた。付句では「記」は梶の葉書きになるか。七夕祭のとき、七枚の梶の葉に詩歌などを書いて供え、芸能の向上や恋の成就を祈った。「天の河とわたる舟の梶の葉に思ふことをも書きつくるかな」(後拾遺集・秋上・二四二、上総乳母)

21 稀にあふ露の契はうきちぎり 其阿

〔式目〕秋(露の契) 降物(露) 恋(あふ)

〔語釈〕○露の契 はかない約束。「七夕の露の契りの玉かづらいく秋かけてむすびおくらん」(続千載集・秋上・三五二、有

房。

〔句意〕二星がたまさかに逢うという、はかない約束はなんとつらい定めか。

〔付合〕雲がかかつて星が見えなくなった。七夕なので秋の恋とした。「稀にあふ星の契りよ人やりの道ならなく何わらん」(柏玉集・秋上・六四八「七夕別」)。

22来。跡草無媒。(来跡 草 媒無し) 龍

〔式目〕雑 植物草(草) 人倫(媒) 恋(媒)

〔語釈〕○来跡 人が訪ねた跡。第一字不分明、「不」と読む翻刻もある。○無媒 歌題にも「無媒介恋」があり、恋の仲立ちをする人がいない状態を詠む。「おもふ事いはむつかひのなきをわび心をもみぞ君にやりつる」(惟方集・一八一)など。邸を訪れても取り次ぎが居ない、荒廃したさまを指すことも多い。転法輪三条実香が三条西実隆に贈った詩にも、「昨夜春寒一寸灰、雪埋径路愈無媒(昨夜春寒一寸の灰、雪径路を埋め愈々媒無し)」(再昌補遺・二四四)とある。

〔句意〕人の訪れた跡はあつても、草が茂るばかりで、取り次ぐ人もいない。

〔付合〕「露↓草」(連珠)。前句の恋を、荒廃した屋敷に住む女を男がたまさかに訪ねる情景として説明した。

23占。隠人倫絶。(隠を占めて人倫絶ゆ) 湖月

〔式目〕雑 人倫(人倫) 居所体(句意) 述懐(隠)

〔語釈〕○占隠 「占隠棲」の意か。隠棲の地を定めること。

〔句意〕隠棲の地を定めれば、訪ねる人間は居なくなる。

〔付合〕前句を隠者の庵のありさまとした。

24ひとり伴ふ友鶴の声 蘭

〔式目〕雑 動物鳥(友鶴) ②鶴1

〔語釈〕○友鶴 仲のよい鶴。またつがいの鶴。仙人が友鶴を伴う構図はこの時期の和歌に多い。「仙人のよはひをまなぶ友鶴をともなふ君もかぎりやはある」(貞敦親王御詠・九二〇、西園寺実宣)。

〔句意〕ひとり従う、仲のよい鶴の声。

〔付合〕前句の隠者を仙人とし、人間ではなく、鶴を伴っているとする。

25盡欲縮湘景。(盡く湘景を縮めんと欲す) 晴信

〔式目〕雑 名所(湘)

〔語釈〕○縮湘景 「湘景」は瀟湘八景のこと。中国湖南省、長江中流の洞庭湖に注ぐ瀟水と湘水の二つの川を作る八つの景勝。詩歌絵の題材として流行した。その景勝を縮めるといふのは仙人の技である。「壺中天地乾坤外、夢裏身名旦暮間(壺中の天地は乾坤の外、夢の裏の身名は旦暮の間)」(和漢朗詠集・下・仙家・五四〇、元稹)。

〔句意〕八景もここにすべて縮めようと思う。

〔付合〕仙人から「縮地」を出した。後漢の費長房は仙人の壺公に従って壺中の世界に行き、仙術を得て自身も土地を縮めた(蒙求・長房縮地)。「費長房は鶴に乗りて天に上りけり」(流

布本曾我物語」など、室町期には鶴と結びつき画題として好まれた。中本大「鶴に乗る「費長房」本邦における漢画系画題受容の側面」(立命館文学598 二〇〇七年二月) 参照。

26 漕ゆく船の遠きうら波

台運

〔式目〕 雑 水辺用(うら波) 水辺外(船) 旅(船)

〔語釈〕 ○船 新式に「海路・渡船は旅也」とある。

〔句意〕 漕ぎ去る船が遠く見える浦に寄せる波。

〔付合〕 瀟湘八景の「遠浦帰帆」から浦・船を出す、五山禅林で親しまれた句、「看(覧) 盡瀟湘景、和船入画図(看盡す瀟湘の景、船に和して画図に入る)」(嘉泰普燈録卷二十八ほか)により、風景を眺めつつ行くと、まるで船とともに絵の中に入ったようだ、と興じた。

27 仄にも見渡しかすむ朝朗

其阿

〔式目〕 春(かすむ) 時分朝(朝朗) 聳物(かすむ)

〔語釈〕 ○朝朗 朝ぼらけ。夜がほんのり明けて物がぼんやり見える状態。またその時分。

〔句意〕 見渡すとはのかに霞む、この朝ぼらけ。

〔付合〕 漕ぎゆく船→朝ぼらけ。本歌「世の中をなににたとへむあさぼらけこぎゆく舟のあとのしら浪」(拾遺集・哀傷・一三三七、沙弥満誓)による。

28 花の香ふかく月のこる空

長伝

〔式目〕 春(花の香) 光物(月) 時分朝(月残る) 植物木

(花) ②花2 ③朝月1 ④空2

〔語釈〕 ○花の香ふかく 夜深くではなく花の香が深いとした。「ねやまでも花の香ふかき春の夜窓にかすめる入りがたの月」(風雅集・春中・一二五、永福門院内侍)。

〔句意〕 花の香は濃厚に立ちこめ、まだ空に月が残る。

〔付合〕 霞↓ふかき(連珠)。明け方の情景で付けた。

29. 鶯舌春破(鶯舌 啼きて春破れたり) 湖月

〔式目〕 春(鶯) 動物鳥(鶯) ③鶯1

〔語釈〕 ○鶯舌 鶯の鳴き声。「払水柳花千万点、隔楼鶯舌两三声(水を払ふ柳花は千万点、楼を隔つる鶯舌は两三声)」(和漢朗詠集・春・暮春・四五、元稹)。○春破「破春」と同じ。春がたけなわとなる。「御柳垂著水、野鶯啼破春(御柳垂れて水に著き、野鶯啼きて春を破る)」(三体詩・卷三・曹松「長安春日」)による。

〔句意〕 鶯が一声啼いて春がたけなわとなる。

〔付合〕 前句の春の明け方の情景をそのまま受ける。

30 帰る山路は霧やむせばん

信常

〔式目〕 秋(霧) 聳物(霧) 山類体(山路) 旅(山路・帰)

〔語釈〕 ○帰る山路「帰る」のは作中主体か。鶯が山に帰るのは晩春である。また「帰」字は旅となる(漢和法式)。○霧やむせばん「咽霧山鶯啼尚少、穿沙蘆筍葉纔分(霧に咽ぶ山鶯は啼くこと尚少し、沙を穿つ蘆筍は葉纔かに分れたり)」(和漢朗詠集・春・鶯・六五、元稹)により、霧で鶯は見えず、まる

で霧が咽ぶのか、とした。

〔句意〕 帰る山中の道では霧が咽ぶようだ。

〔付合〕 前句の鶯を和漢朗詠集の詩で付けた。

31就荒黄落采（荒に就く 黄落の采） 鳳栖

〔式目〕 秋（黄落） 植物木（采）

〔語釈〕 ○就荒 荒れかけている。「荒」は草が繁茂するさま。

陶潜「帰去来」の「三径就荒、松菊猶存（三径は荒に就けども、松菊は猶ほ存す）」（文選卷四十五・辞）による。「三径」は庭に造った三本の通路。○黄落 木々の葉が変色して枯れるさま。「是月也、草木黄落、乃伐薪為炭（是の月や、草木黄落す、乃ち薪を伐り炭を為る）」（礼記・月令・季秋）。○采 彩り、「菜」にも通じ、葛の意もある。他の翻刻では「宋」とするが、対句からしてここは樹木の意の「采」であろう。

〔句意〕 小径は荒れかけて、落葉が黄の彩りをそえる。

〔付合〕 前句の「帰る」から官を辞して故郷に帰った陶潜の故事につなげる。

32炊黍黑甜槐（黍を炊ぐ 黒甜の槐） 龍

〔式目〕 秋（黍） 植物木（槐）

〔語釈〕 ○炊黍 唐の盧生（るせい）の故事、所謂「邯鄲の夢」を指す。

盧生は邯鄲の宿で道士呂翁に出会って、夢で見たことの叶う枕を与える。盧生は榮華を極めて死ぬが、全ては夢で、宿では火に掛けた黍がまだ炊き上がっていなかった。「盧生欠伸而悟、見其身方僂於邸舍、呂翁坐其傍、主人蒸黍未熟、觸類如故、生

蹶然而興曰、豈其夢寐也（盧生欠伸して悟むるに、其の身は方に邸舎に僂し、呂翁は其の傍らに坐するを見る、主人黍を蒸して未だ熟せず、觸類故の如し、生蹶然として興きて曰く、豈に其れ夢寐なるかと）」（文苑英華卷八三三）。なお、同じ説話を載せる太平広記卷八十二は「黍」を「黄粱」とする。太平記卷二十五、謡曲「邯鄲」も同じ。

○黒甜 午睡を指す俗語。「西清詩話云、南人以飲酒為軟飽、北人以昼寝為黒甜（西清詩話に云ふ、南人は飲酒を以て軟飽と為し、北人は昼寝を以て黒甜と為す）」（詩人玉屑卷六・点石化金）とある。○槐 エンジュの木。これも槐の下で昼寝をして夢を見た、唐の淳于棼の故事、所謂「南柯の夢」による。

〔句意〕 黍を炊く間、その下で昼寝をしていた槐の木。

〔付合〕 前句と対句になる。季節はとくに定まらないが、黍も黄粱も秋に収穫し、30からの続きもあり秋の句とした。

33ゆく心千里隔つる波もなし 蘭

〔式目〕 雑 水辺用（波）

〔語釈〕 ○千里 はるかな距離、あるいは強い隔絶感。「さ夜深みいでそよ萩にみし夢は千里へだつる風の中垣」（為広詠草・二二八「隣家萩」）。

〔句意〕 飛んでいく心は千里のあなたに届き波も隔てない。

〔付合〕 前句の「夢」に、寢覚めの心は遠くまで行くことを、本歌「はるかなるものこしまでもゆく物は秋の寢覚めの心なりけり」（千載集・秋下・三〇二、大武三位）によって付ける。

34. 幾度緑徘徊 (幾度か 緑 徘徊す) 鳳栖

〔式目〕 夏 (緑) 植物草 (緑)

〔語釈〕 ○ 緑 緑の草。蘇武の詩を踏まえるならば、夢のうちに砂漠から緑の草の生える故郷に戻った、とするか。

〔句意〕 幾度か緑の草の上で徘徊したのであろうか。

〔付合〕 千里 ↓ 徘徊。蘇武の詩を本説として付ける。「黄鵠一遠別、千里顧徘徊 (黄鵠一たび遠く別れ、千里に顧みて徘徊す)」 (文選巻二十九・雜詩上、蘇武「詩四首 其二」)。鸛 (黄鵠) は一たび遠くに飛び立つと、千里の彼方でも古巣を振り返り行きもとおる、という。

35. 吟履為誰湿 (吟履 誰の為に湿ほう) 湖月

〔式目〕 雜 人倫 (誰) 恋 (句意) ③ 履 1

〔語釈〕 ○ 吟履 詩人の履物。転じて歩き回りながら詩を吟ずること。「吟杖」などから派生した語か。晴信の「新正口号 (其二)」詩に「風送鶯寒意結加、梅辺吟履月横斜 (風鶯寒を送りて意結はるること加はる、梅辺の吟履月横斜)」 (武田晴信詩藁) など。○ 湿 濡れた土の上を歩くさま。夜の間に女のもとに通ったため。

〔句意〕 詩人の履物は誰のためにしっとり濡れるのか。

〔付合〕 「徘徊」から「吟履」を出した。なお策彦と紹巴の作と伝えられる「沙湿履無声 / しのぶ夜の雨はなかなかたよりにて」 (百物語巻上・四十) のように、恋人のもとに通った香が湿るという情景は当時好まれた。深沢真二『「和漢」の世界―和漢聯句の基礎的研究』 (清文堂出版、二〇一〇年) 第一部第

四章「和漢聯句の俳諧的側面―『百物語』所引句をめぐって」参照。

36. 詩篇教仏推 (詩篇 仏をして推さしむ) 鳳栖

〔式目〕 雜 釈教 (仏)

〔語釈〕 ○ 教仏推 この「仏」は唐の詩人賈島を指す。唐の李洞が賈島を崇拜するあまり、その像を鑄造し、「賈島佛 (賈吟仏)」と称したとの故事による (北夢瑣言巻七、齊東野語・賈島佛)。当時もよく知られ、たとえば景徐周麟の「種玉宗祇菴主肖像贊」にも「出遊名区、賈吟仏跨驢背 (出でて名区に遊ぶときは、賈吟仏のごとくに驢背に跨り)」 (翰林葫蘆集卷十二) とある。また「推」は推敲で、これも賈島の故事によるもの。

〔句意〕 詩篇は仏 (のような賈島) をして推敲させる。

〔付合〕 前句「吟履」を、苦吟しつつ彷徨する詩人とみなした。そこで代表的な苦吟の詩人である賈島を出す、「佛」としたのは、聯句も終盤となり、釈教の句とする配慮であろう。

37. 法もたゞ謀をや道ならん 其阿

〔式目〕 雜 釈教 (法) ② 法 1

〔語釈〕 ○ 法 仏法。○ 謀 はかりこと。計略・籌策。ここでは方便の意か。

〔句意〕 その法もただ方便を手立てとするのであろう。

〔付合〕 「仏 ↓ 御法」 (連珠)。前句で「仏」に詩を推敲させるのはおかしいが、それも仏法の方便なのか、と応じた。

38身を治てぞ世をおさめしる 周閑

〔式目〕 雑 人倫（身） 述懷（句意） ⑤世一

〔語釈〕 ○身を治てぞ 行いを整える。脩身。呂氏春秋卷三・季春「昔者先聖王成其身而天下成、治其身而天下治（昔の先聖王は其の身成りて天下成る、其の身を治めて天下治まる）」（太平御覽卷七二〇にも）、あるいは大学「身脩而后家斉、家斉而后国治、国治而后天下平（身脩まりて后に家斉ふ、家斉ひて后に国治まる、国治りて后に天下平らかなり）」、所謂八条目の一つ。○おさめしる 統治する。「海のはて山のおくまでをさめしる御代にぞなびく浪も嵐も」（弘長百首・祝・六九五、基家）。〔句意〕 自身の行いをきちんとした上で世を統治する。

〔付合〕 前句の「謀」を統治の手段と見た。用例は「いかにいひてか人を靡けむ／みだれたる国を治むるはかりこと」（竹林抄・雑下・一五四二、専順）、「うらうへのあるをつかひにともなひて／はかりことにぞ民もおさまる」（羽柴千句第九・一〇〇、兼如）など連歌にはある。これはあくまで権道であるとして、道学に沿った主張をする。

39何事も心を種のわざなれや 長伝

〔式目〕 雑 述懷（心）

〔語釈〕 ○心を種の 古今集仮名序「やまとうたは人の心を種として」。○わざ 意図的な行為。

〔句意〕 万事、心から起きる行いであらうよ。

〔付合〕 前句の大学には「欲脩其身者、先正其心（其の身を脩めんと欲する者は、先づ其の心を正しうす）」とある。あるいは

は「心地含諸種、普雨悉皆萌（心地に諸の種を含み、普き雨に悉く皆萌す）」（景德伝燈録卷五）によるか。この偈は広く知られており、風姿花伝第三問答条々にも引用される。

40わする、草のしげらずもがな 蘭

〔式目〕 雑 植物草（わする、草）

〔語釈〕 ○わする、草 忘れ草。萱草とも。身につけると物思いを忘れるという。「忘草たねとらましを逢ふ事のいとかくかたき物としりせば」（古今集・恋五・七六五、よみ人知らず）。心にも生え、古くからその種を問題にした。

〔句意〕 そこに忘れ草が茂らないで欲しい。

〔付合〕 「心の種」から「忘るる草」は、「今はとて忘るる草の種をだに人の心にまかせずもがな」（伊勢物語・二十一・九）などで導く。

41若盟兄弟好（盟の若し 兄弟の好み） 湖月

〔式目〕 雑 人倫（兄弟）

〔語釈〕 ○兄弟好 兄弟の仲。「愛君兄弟好、書向頼中誇（君の兄弟の好きを愛す、書して頼中に向ひて誇らん）」（岑嘉州集・卷五「夏初醴泉南樓送太康顔少府（夏初醴泉の南樓に太康の顔少府を送る）」）。

〔句意〕 盟約のようだ、兄弟の仲らしい。

〔付合〕 わする草↓兄弟。この寄合は、俊頼髓脳や今昔物語集卷三十一・兄弟二人殖萱草紫苑語第二十七に見える説話に基づく。中世にもよく知られた説話で、詞源略注は俊頼髓脳を引

用する。また法華經直談鈔や法華經鸞林拾葉鈔にも見える。兼載の古今集講釈を兼純が聞書した古今秘聞（国文学研究資料館蔵正宗文庫旧蔵本）は、恋五・八〇二番歌の注で、「漢古事」として掲げる。「漢古事」二云フ、兄弟二人、親没後ニ思ヒヲセシニ、兄ハ余リニ思ガ切ナレバ忘レサセ給ヘト祈ル。弟ハセメテ嘆クコソ形見ナレバ是不忘様ニ祈ル。親ノ墓ヨリ鬼神出デテ、兄ニハ萱ヲ与ヘテ、是ハ我が心也可忘ト云ヘリ。弟ニハ紫菀ヲ与ヘテハ我がカバネ也ト云ヘリ。依之、心ノ方ヲ取りテ読メル歌也」。

42 ねぐらの鳥の去さらぬこゑ

惠臨

〔式目〕 春（鳥） 動物鳥（鳥） 居所体（ねぐら） ④鳥1

〔語釈〕 ○ねぐらの鳥 「眠っている鳥。詩歌語」（日葡辞書）。鳥は鶯か。「あけわたる都の花のねぐらをは出て去らぬ鶯のなく」（招月正徹詠歌・四〇・洛鶯）。○去さらぬ 「さりさらぬ」は、一方は去り、もう一方は去らない、の意か。「待れつる雲間の月のいかなれば影し影せぬ宿を分くらん」（甲信紀行の歌・実澄）。

〔句意〕 時で寝ていた鳥は、あるいは飛び去り、あるいは去らずにいて鳴いている。

〔付合〕 前句の兄弟を、巢中の鳥たちに転じた。

43 野遭春日促（野に春日の促すに遭ふ） 晴信

〔式目〕 春（春日） 光物（春日） ②野1

〔語釈〕 ○春日促 春の日がまるで野遊びにせき立てるよう照

らす。

〔句意〕 春のうらかな日に誘われて野遊びに出かける。〔付合〕 なお寒いので、春日が野に出るよう促すとした。また時の鳥が鶯とすれば初春の光景。ねぐらを出ぬ鶯↓余寒（さゑかへる）（拾花集）。

44 雪使韶光纒（雪は韶光を纒かならしむ） 龍

〔式目〕 春（韶光） 光物（韶光） 降物（雪） ④雪1

〔語釈〕 ○韶光 春のうらかな光、その景色。白雪と合わせて瑞祥としたか。「若使韶光知我意、今宵旅宿在詩家（若し韶光をして我が意を知らしむれば、今宵の旅宿は詩家に在らまし）」（和漢朗詠集・春・三月盡・五四、道真）。

〔句意〕 雪は春の韶光を僅かなものにする。

〔付合〕 余寒の光景として付けたか。「いまさらに雪ふらめやかげるふのもゆる春日となりにしものを」（新古今集・春上・二一、よみ人知らず）など。ただ、これは降雪ではなく、残雪が白く輝いて、陽光を忘れさせる、というものが。

附記 和漢聯句の閲覧と注釈刊行をお許しいただいた積翠寺住

職井村一昭師に御礼申し上げます。本稿は科学研究費補助

金「郷土史料を活用した戦国大名文芸の注釈と研究―上杉氏・武田氏を中心に」（17K02424）の成果の一部である。

（おがわ・たけお）

(式目表)

初　　折　　裏														初　　折　　表									
22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1		
来跡草無媒	稀にあふ露の契はうきちぎり	星まつる夜の半天の雲	記晴歌月出	泉令琴韻摧	潮与佩声漲	巨海極三才	仮山含万象	うすき霞に匂ふ梅が香	八重咲もひとへを花の初にて	政質泰交回	写情春意緩	末まで色のふかきことの葉	名に高き道をぞあふく家の風	龍門魚曝腮	水上もわかず落くる滝見えて	晩雨はるゝあとの山の端	月は猶残る雲間の影涼し	かり寝の夢の覚るほどなき	掲衣空外力	新霜有雁来	心もて染ずはちらじ小萩原	本文と作者	
龍	其阿	台運	(鳳栖)	鳳栖	龍	晴信	蘭	信常	龍	鳳栖	晴信	周閑	長伝	湖月	恵臨	其阿	台運	蘭	鳳栖	龍	晴信		
			月						花								月					花月	
雑	秋	秋	秋	夏	雑	雑	雑	春	春	春	春	雑	雑	雑	雑	夏	夏	雑	秋	秋	秋	季	
		光夜	光夜													夕	光夜	夜				光時	
	降	聳						聳								降	聳			降		聳降	
				水体	水用	水体	山体							水外	崩森	山体						山水	
草								木	木										鳥	草		動植	
人																						人	
													居体						衣			居衣	
														名				旅				旅名	
恋	恋												述									恋述	
																						神釈	
				②泉1	②潮1	②海1		⑤梅1	④花1			②ことの葉1	③家1		①滝1	①晩雨1	③夏月1 ②涼1	④寝1	④空1 ①砧1	②雁1	④原1	一座何句物	

名 残 折 裏								名 残 折 表															
44	43	42	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23		
雪使韶光纔	野遭春日促	ねぐらの鳥の去さらぬこゑ	若盟兄弟好	わするゝ草のしげらずもがな	何事も心を種のわざなれや	身を治てぞ世をおさめしる	法もたゞ謀をや道ならん	詩篇教仏推	吟履為誰湿	幾度緑徘徊	ゆく心千里隔つる波もなし	炊黍黒甜槐	就荒黄落采	帰る山路は霧やむせばん	鶯舌啼春破	花の香ふかく月のこる空	仄にも見渡ししかすむ朝朗	漕ゆく船の遠きうら波	盡欲縮湘景	ひとり伴ふ友鶴の声	占隠人倫絶		
龍	晴信	恵臨	湖月	蘭	長伝	周閏	其阿	鳳栖	湖月	鳳栖	蘭	龍	鳳栖	信常	湖月	長伝	其阿	台運	晴信	蘭	湖月		
																花月							
春	春	春	雑	雑	雑	雑	雑	雑	雑	夏	雑	秋	秋	秋	春	春	春	雑	雑	雑	雑		
光	光															光朝	朝						
降															聳		聳						
											水用				山体			水外					
		鳥		草		人			人	草		木	木		鳥	木				鳥			
			人																		人		
		居体																			居体		
															旅			旅	名				
					述	述			恋												述		
							釈	釈															
④雪 1	②野 1	④鳥 1				⑤世 1	②法 1		③履 1						③鶯 1	②花 2 ③朝月 1 ④空 2				②鶴 1			